

はしがき

フランクフルト学派を代表するアドルノ（Theodor W. Adorno, 1903-1969）の有名な警句「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」¹⁾（Nach Auschwitz ein Gedicht zu schreiben, ist barbarisch）が突き付けているように、アウシュヴィッツやヒロシマ、ラーゲリを経て、わたしたちにはいかなる文化活動・学術活動が可能なのか、第二次世界大戦後の世代は自問し続けてきました。2024年1月1日に能登半島を襲った地震および9月21日から23日にかけての被害、また、ウクライナやガザにおける紛争などを目の当たりにして、わたしたちはまさに今、その自問をさらに強く自覚しているのではないのでしょうか。

一方、公立小松大学国際文化交流学部は、「国際社会に対する知識と国際感覚を備え、強い人間力と豊かな知性・感性を持って地域社会の振興と我が国の持続的発展に貢献できる」グローバル人材を育成するという理念のもと、日々の教育活動・研究活動・社会貢献活動を行っています。そして、その際大切にしているのは、人文科学、社会科学にとどまらない自然科学や医学等を含めた学際性に基づいて、こうした現代的課題の解決に少しでも貢献することです。

『国際文化』第7号は、4名の執筆者がそれぞれの専門性に基づき、この地域の歴史的文化的背景や経済活動における課題、さらにはピジン・クレオール言語学者の言語観やコミュニケーション・アイデンティティ学習の問題を多様な視点から探求しています。こうした多彩な研究活動を教育実践に生かしつつ、前述の自問に少しでも答えを見出すべく、引き続き努力していきたいと思えます。

公立小松大学
副学長 志 村 恵

1) テオドル・W・アドルノ『プリズメン』（渡辺祐邦、三原弟平訳）ちくま学芸文庫、1996年、36頁。